

## 発行にあたって

本資料集は、第十七集および第十八集に続き、『法学新報』のなかから中央大学関係の記事を抜粋・編集したものです。一九〇九（明治四十二）年十月発行の第十九巻九号から一九一四（大正三）年十二月発行の第二十四巻十一号にいたる五八冊から、一三五件の史料を収録しました。

本集ではこれまで同様、主に「雑報」および「中央大学記事」欄から学事・行事関係の記事を中心として掲載しました。入学式・卒業式・学年試験・運動会・武道大会など定例の学校行事に加え、諸学会の活動や討論会・演説会・講談会などの様子が詳しく伝えられています。また一九〇九年九月の商業学科の新設をはじめ、新聞事業関係の特殊技能・知識を教授する新聞研究科の開設、一九一一年四月の創立二十五周年記念式、学生の弁論や体育の奨励を目的とした学友会の結成、ドイツ刑事法学の長老カール・フォン・ビルクマイヤーの蔵書を譲り受けたビルクマイヤー文庫の設立など、多くの関係史料を収録しています。いずれも本学の歴史上特筆すべき事項と言えるでしょう。

一方、この時期には、創立者の一人で一八九一年以来本学の院長・学長をつとめた菊池武夫をはじめ、同じく創立者で講師・幹事の山田喜之助、草創期の講師でのちに外務大臣となった小村寿太郎、『法学新報』に「民法出テ、忠孝亡フ」を発表し民法典論争の中心的人物の一人となった穂積八束、本学最初の海外留学生としてドイツに留学し、この本学で教鞭を執った渡辺豊治といった重要人物が亡くなっています。それぞれの葬儀の様子や弔辞などから先人の業績を確認することができます。

菊池武夫の没後、本学の学長は奥田義人から岡村輝彦へ、そして再度奥田へと短期間のうちに替わりますが、この時期は本学の卒業生たちが各界で活躍し始める「新世代の誕生」の時期であるとも言えます。大学のいろいろな行事にも多くの学員が積極的に参加をしています。

本集に収録した諸史料を通して、明治末年から大正初年にかけての本学の様相を読みとっていただければ幸いです。

二〇〇二年三月

中央大学百年史編集委員会専門委員会主査

菅原彬州